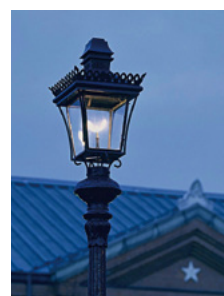




“明治の広重”と称される小林清親の『日本橋夜』（1881年、木版画）。ガス灯は文明開化のシンボルとして、この時代のさまざまな錦絵に描かれた。

ガスと暮らしのモノがたり ◆ 第1回 ◆

明治① 文明開化を照らしたガス灯



日本で最初に実用的なガス灯が使われたのは1871（明治4）年の大阪造幣局。金属を溶かすのに用いるコークスを石炭から製造する際に発生するガスを、ガス灯に活用しました。ガスと暮らしの歴史は、照明から始まったのです。

本格的なガス事業の幕開けは明治5年の横浜で、居留地に住む外国人の声に応じてガス灯が立てられます。事業の創始者はフランス人技師のアンリ・プレグランと、実業家の高島嘉右衛門のふたり。プレグランは中国・上海でガス灯の整備を行った後に来日。一方の嘉右衛門は横浜の父と呼ばれる人物で、同じ明治5年に新橋〜横浜に開通した日本最初の鉄道敷設にも関わりました。

2年後の明治7年11月には神戸で、12月には東京で相次いでガス事業がスタートします。

東京最初のガス灯は、銀座通りにお目見えした85本。最先端のレンガ建築が立ち並ぶ街に煌々と輝く灯りは、江戸の暗い夜しか知らなかった人々の目に、さぞまぶしく映ったことでしょう。当時の新聞では「東京一面照らします、照らします」（明治7年12月8日 郵便報知）と謳われました。ガス灯はまさに、文明開化を照らし出すシンボルだったのです。

程なくして浅草や両国にもガス灯が延伸しますが、当時は自動点火などありません。そこで生まれたのが、点消方てんしょうかたという新たな仕事。硫黄を火種とした点火棒を用いて1灯ずつ火を灯し、朝になるとまた1灯ずつ



三代目・歌川広重の『東京名所図会 銀座通り煉瓦造』（1879年、木版画）。左にいるのが点消方。割れたガラスの補修やメンテナンスもこなした。

つ消灯に回ります。点消方になれるのは男性で、朝寝坊をして灯きっぱなしになると大変なので妻帯者が条件とされました。当時1本のガス灯にかかった料金は1カ月に3円55銭5厘で、現在の貨幣価値にして数万円とも言われます、今では考えられないほど、ガスは高価なものだったのです。

こんな理由もあったのでしようか、庶民の家庭では依然、江戸時代と変わらぬ行灯あんどんやロウソクが使われていました。ガスの用途が広がるまでには、もう少し待たなければなりません。次回は家庭用照明への普及や、思わぬライバルの出現にまつわるモノがたりを紹介します。